

出雲地方 に於ける 貞觀期佛像彫刻の様式

天 野 茂 時

目 次

- 一、はじめに
- 二、仏像彫刻の考察
 - (一) 万福寺諸像
 - (二) 清水寺像
 - (三) 仏谷寺諸像
 - (四) 巖倉寺諸像
- 三、結 論
- 四、おわりに

一、はじめに

彫刻史に於ける様式研究の対象となる作例が、正しい製作年次の上にあることは必要なことではあるが、しかし作品そのものが持つ様式は、製作年次によつて左右されることは誤りである。即ち様式の發展は自律的のことであつて、他の条件によつて動かされるような、他律的な存在ではない。

それはただ様式の変化の時期、或いは又その範囲期間といった問題

に於て、始めてその製作年次といったものが問題とされるのであつて、むしろ製作年次は第二次的のことといえる。

出雲地方に於ける仏像彫刻が、殆ど製作年次が不明確であることは、研究上障害になつてゐることは勿論であるが、しかし地方作品の様式といえども、それは吾国の美術史学的時代様式といつた範囲を外れるものでない以上、これ等と比較の上に於て地方の様式が見られる時、それらの時間的位置も比較的明確にすることが可能である。そして製作年次の不明確な対象作品が対象価値を失うものとは思わない。以上のような前提によつて、貞觀期の仏像として次ぎの作品を対象にして考察したい。

万福寺。四天王像、薬師如来像、観音菩薩立像（四軀）

佛谷寺。薬師如来坐像、聖観音立像（三軀）

菩薩形立像。

清水寺。十一面観音立像。

巖倉寺。帝釈天立像、聖観音立像。

以上の中、清水寺の十一面観音は、天平様式（日本美術史大系彫刻篇）とされているが手法的にもかなり進んだ鬚波式刃法の見られるこ

とからして、貞観的のものと考察する。又万福寺四天王像も、天平様式とする説もあるが、詳細に観察すれば、かの天平的軽快性が失われ、重量感にとんだ量的 (Volume) な点からして、貞観期の様式と見られるものであり、又巖倉寺の聖観音像、帝釈天像が藤原様式(日本美術史大系彫刻篇)にいられてあるが、出雲地方の仏像彫刻で藤原初期の様式をもつ華藏寺の薬師如来像を対象として考察するとき、巖倉寺の像は、量的なる意志に富むものであつて、貞観期と見るべきである。

これらの仏像彫刻は、貞観様式として一貫するものであるが、この様式を中央の貞観時代様式と同一視してすぐ結論づけることはできない。そこには幾多の地方性が見出されるのであつて、その地方性の発展の上に立つて考察されねばならぬ。

二、 佛像彫刻の考察

(一) 万福寺(出雲市東林木町) 諸像。

本寺は寺伝によれば、鰐淵寺(出雲平田)の開山僧と伝えられる智春上人により推古天皇御宇開創されたというが、確然たるものではない。しかし永祿年間浄土宗に改宗される以前は、大寺薬師と称され天台宗として盛大であつた。

それは安置された仏像、それに本寺の背山に、後期古墳の出雲地方としては豪壮な前方後円墳があることからしても本寺の歴史は新しいものではない。しかし現万福寺々域は、徳川の頃北約三丁ばかり奥の広地から移されたもので、当時洪水の山崩れに合つて、寺院及び仏像

が土砂に埋つたことが記録されている。このことは現存仏像が磨滅の体をなし、寺院特有の煤よごれがないことでも解る。又これらの仏像がいづれも五尺、六尺といつた高さを持つことを考えれば、旧本堂が十二間に七間の建築であつたと伝えられていることは、あながち不当のことではないと思われる。又旧大寺薬師が内に四十二坊を持ち、数多の末寺を有していたと伝えられることも、本寺の周辺に存する小寺院によつても首肯される、尙現万福寺の仁王門が、他の建築とその様式を異にしていることからしても、この寺地が旧大寺薬師に属する一寺院であつたことがしられる。

本寺に現存する九軀の木像(旧国宝)の中、四天王像の四軀は楠の一木彫成、他は檜の一木彫成によるものである。今その各々の手法様式について考察をすゝめる。

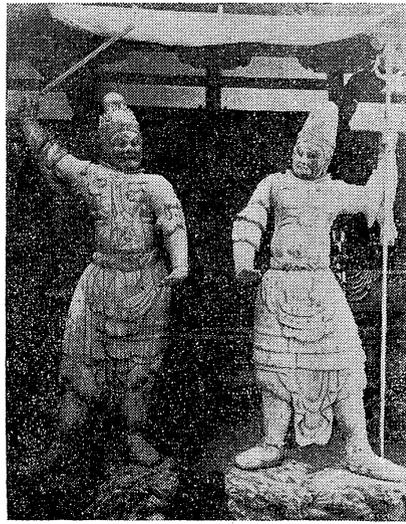
四天王像(持国天、增長天、広目天、多聞天)

持国天像(高さ、六尺三寸四分、岩座高、二寸四分)は、宝冠を戴いているため頭髪を見ることは出来ないが、図の如くやゝ腰を右にひねつて、左手は頭部辺りに位置せしめて、頭を軽く右方に傾けた姿で棒をついている。それと対応するが如く右肩をやや上げて、ぐつと下に右手を突き張らせている。腰は右にひねつて、右足をやや斜め前に出してゐる。

顔面は極くおだやかな自然な形のうちに引きしめられて、視点は右手先に、やや下へ向けている。特に下半身から下における衣文は、素に大まかであつて重量感のあるものである。

增長天像(高さ、六尺一寸八分、岩座高、二寸四分)は、頭に鬘を結

び前半面透し彫り様の宝冠を載っている。右手はやや後に高く上げて剣を持ち、それと対応して左手は下に伸ばされ、肩がやや前に張り出しており、掌を反らせている。腰は左にひねつて、右足を斜め前に出している。



左 増長天像 右 持国天像

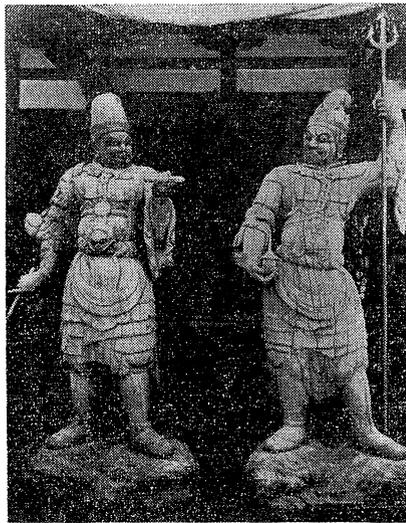
顔面の
相好は比較
的動きに富んで
いて、やや
や眼をつり上げ、
口を開いた表情は
大まかで

豊かな筋肉によつて忿怒相にもかかわらず、それが比較的人間的実在性を思わせる。このことは他の像についても云えることであるが。視点は左手先の方に下してゐる。

広目天像（高さ、六尺、岩坐高、二寸四分）は、高い宝冠を載いて、髪の見えないが、右手を後に下し、手首をひねつて筆を持ち、左手は肘を曲げて肩の高さに巻物を持ち、大体直立の姿にて、左足をやや斜め前に出している。

顔面は自然な静かな表情であるが、脛を上げて、ちつと何か物を見つめている感じを与え、頭部を左にひねつて視点を左手先の方にそ

そいでいる。前面の下肢間の裳を欠失しているが、特に腕にたれた衣文に見られる渦巻形は、本像において特に明らかに見られる。そして増長天像と同じく腹部に鬼面を有している。



左 広目天像 右 多聞天像

極く簡単な
前面彫りの宝冠
を戴き、
大体持国
天像と同
一の姿態
をとつて
いる。右
肩を張ら

せて頭部を右にひねり、やや上向いているが視点は下にある。

顔面は極単に引きしめられ、筋肉の動きを感ずることが出来て他像に比して緊張をもたせようとしている。

以上の四天王像は、比較的重量感のある量によつて全体に重厚な感じを与えているが、それは特に下半身に於ける重量性に満ちた表現によるものといえる。下半身に比較して上半身が引き締められて小作りとなり、下えの拵がりに反して、上えの拵がりは圧縮され、比較的そこには力の充実を与えてはいるが、このことは下えの重量性をやや鈍重化した結果となつている。そして全体的に体軀が動作の姿態をとりつ

も、動きの止つた感じを与えているのは、このような原因によるものであろうが、尙開かれた両脚から頭部に至るまでの形態が三角錐体的に安定してしまつてゐることも無視出来ない理由の一つと思う。

説に「体軀の中心線がゆるやかなS字形をなし、腰を右にひねつて稍右足を引き、肘を直角に曲げて棒をついたその左手に対して、ぐつと伸ばして掌を張つて右手の構成する形は、その要所々に支えられてゐる力のアクセントによつて「雄偉」さ、そのものを印象せしめてゐる」と述べられてゐる。確かに体軀の中心線はS字形をなしてゐるが、それによつて動的なものと必ずしも受けとることは出来ない。又「力のアクセントが要所々にあり、それが形態上に多少変化をもたらしてゐることは事実であるが、然しながら例えば突き出された腕或いは肩等が、その力を示しているとは言え、それはむしろ自ら硬化してゐて機能性に欠けた不安を起させるものがある。このことをもつと詳細に見るならば、「力のアクセント」とは、恐らく掌の屈折から肩の張られた力、そして曲げられた肘、更に又手首といつた両手の間に見られるもの、肩部の力から、ひねられた腰えの力及び膝といつたアクセントを意味して云われたものと思うが実際には全体的に力が強調されてゐて、かえつて固体化しようとしてゐることは、特に肩部から両腕を見る時に、それは明らかである。そしてこれはむしろ形態的のアクセントであるといつても差支えないと思う。

又これら大まかで厚い衣文と反転性のない草じりとよろいは、共にその刃法の豪素なことを思わしめるものであるが、このことは顔面に於ける、自然な表情の中に忿怒の相の表われたものといえよう。前記

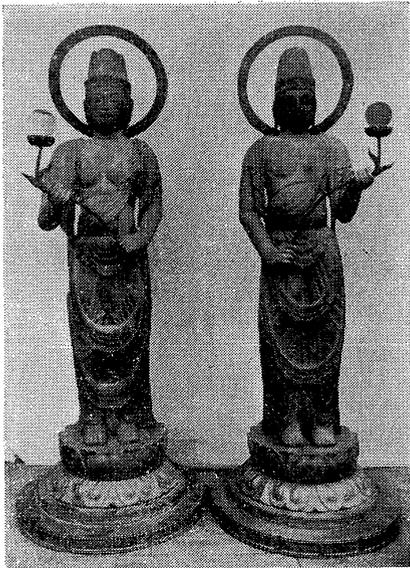
の説には顔面筋肉の取扱いに写実性があるとし、又甲冑の形式が軽快であるとして、これら四天王像を天平様式であるとされるのであるが、然し天平様式に見られる写實的具象性を、万福寺四天王像に見出そうとすることは困難であり、又天平様式の特徴たる、勢いのある反転性を持つ軽快さは、重量性に満ちたるものへと変化してゐて、これを天平様式とすることは一考を要する。しかも既に袖の衣文等に軽い旋転性乃至は渦巻といつた形式を見出すことが出来るのは、これを更に裏づけるものであるといえよう。そこで、これら四天王像を天平様式として割り切ることは出来ないが、この重厚な体軀を簡素な彫りによつて表現し、それが一種の緊張的力と鈍重的量感とがマツチするかの如きものとして直感させられるところに、この四天王像の特色があるといえる。



薬師如来像 (万福寺)

薬師如来坐像
(高さ、四尺四寸一分、台山高、一尺八寸)本像は修補がかなりあつて、

古い姿を伺えぬ点もあるが、頭部に於ける顔面は、比較的広くとられて



観音菩薩像（万福寺）

やや明るいものであるが、全体としては猶塊大なものである。そして衣が非常に厚く、その衣文線も彫りが比較的深く、明瞭な襷波式刀法で刻出してあるが、それは既に装飾的に、整えられたもので、やや形式化されている。そしてこの中なる肉体は、この形式的な厚みのある衣と衣文とによつて圧されて、むしろこの外的衣が肉体に超克していると思われる。このことは内からなる肉体強調による意志性と、力の表示をやわらげることになつたといえる。そして猶塊大な頭部においても、一面的に円い変化に欠けたものとなつた点など、全体に未だ磊塊たるこの体軀を比較的に乏しいものとした所以であるとしてよからう。然して形式的な渦巻の見られることと併せて、これを貞観中期以後に属するものとして考察してよいと思う。

日光（高さ、五尺三寸三分、台座高、一尺）月光（高さ、五尺三寸八分、台座高、一尺）両脇待菩薩像

持物及び光背は後補のものであるが、三道に沿つた胸の隆起は、自然肩への張りとなつ

てはいるものの、それらは全体にやわらかい感じを与え、しかも衣文線は流暢となり、その彫りも浅くなつて来ている。そして全体的には小作りとなつてゐるが、側面から観察すると奥行もあり、殊に頭部はその感が甚しく、量的な表現を観ることが出来る。

面の取扱いは次第に表面的となり、その彫りは浅くなつてゐる。殊に月光菩薩像の顔を観察すると、隆起のない肉づけとなつてゐることに注意される。しかし両像は、全体的に統一のとれた素直なものでその素直な中に素朴な精神性をうかがうことが出来る。こゝで注意すべきことは、月光菩薩像の肩に垂髪の浮彫が残つてゐるということである。以上の観察から、時代様式的には、天平末期から貞観期へかけての作と見られるものである。

観音菩薩立像（高さ、四尺八寸八分、台座高、九寸三分）

観音菩薩立像（高さ、五尺三寸、台座高、一尺）

両像共に光背は後補のものであり、肘から先きの修補になるものである。前者菩薩立像は前記両脇侍像を含めた中で小作りで側面から見ても重量的 Volume に乏しい、しかしあまり張らない身と胸とが更に腹部において引きしめられて、そこから發展する下半身への Volume は、良く全体的に調和が保たれて、左右対称的な単純な姿態をとりながらも、捨てることのできない温和なやわらかい精神性に満ちたものということが出来る。このことに結論的には万福寺菩薩像一般に通ずること、形態的な変化には乏しいのであるが、静的にまとまつて落ちついた感じを与えるものである。然して前者の像に於ける頭部に於て、顔面が極めて小さく冠がそれに比較して高いのであるが、それ



観音菩薩像（万福寺）

は下半身が比較的ゆつたりとして高いのに反して、極めて短い上半身にあつて、不自然な

ものでなく、かえつてそれはすらりとした感じへの調和をなしているとも考えられる。この点からすれば後者菩薩像は、その体軀の上に於て比較的散漫な感じがあるが、それは強調された稍々力のある肩幅、そこから發展する胸の Volume 等と腹部との統一が失われて変化なく、そのまゝ下半身へとそれが發展せしめられた点にあると思われる。しかしこの両像は前記兩脇侍像の様式と同様のもので、その衣文の取扱い方或は彫りの味に於いてもそのことがいえる。

以上考察したところから万福寺諸像の手法様式の關係について考えると、四天王像が塊的な厚重さと、その動態とによつて、力と威厳とを強調しようとしながら、かえつてそれは重量性の澁滞感から、比較的その動態を定着化せしめたのであるが、この点について薬師如来坐像は、全体的に稜角的な鬚波式衣文によつて引き締め、四天王像の量の澁滞感から離れて、一つの塊的形態として充実せしめているのでは

あるが、それは既に形式的になつていて、四天王像程の内的精神性の充実を見ることは出来ない。しかも四天王像に見られた、筋肉の変化もこゝでは益々弱められて、それは一面的塊大性に過ぎないものとなつてゐる。

この点については、月光、日光兩脇侍及び兩観音菩薩像にも云えることであるが、薬師如来像程の単なる塊性的形態に終らず、淺彫りながら比較的变化ある刀法を見せて全体的に柔らかな感じを出しているのである。そしてこゝでは四天王像に見られた重量ある Volume は次第に失われているのである。しかも四天王像に於いて見られた自然な比較的ゆつりのある表情は、こゝに於て益々温和な静かな落着いたものになつていて、神秘的な意志性といつたようなものを感じることは不可能であるこのことは又四天王像及び薬師如来像についても言えることで、一般にそれらを温和性への志向として見ることが出来る。それは全体的に大まかで單純な四天王像の如き衣文線、或いは菩薩諸像に於ける比較的淺彫りとなつた稍々柔らかな刀法及び薬師如来像に見られる外的形式の内に対して超克した姿等から出るものであつて、大極的にはこれらの刀法の簡素なものとして見ることが出来る。しかも四天王像が、ごく自然的形相ということから特に顔面に於て、比較的人間的な表情を見ることが出来たのである、いわばこれは未だ忿怒的緊張の中に於て感じられるものであるが、諸菩薩像に於ては柔らかな表情の中に於て人間的なものを感ずることが出来るのであつて、垂髪の浮彫りと併せて重要なことゝいわねばなるまい。然しこれらの事実を直ぐと天平様式に結びつけて考えることは、危険なことであつ

て、そこに於ける具象的実在性とは、その内容を異にするものである。

そして四天王像が時間的には最も早いものと思われるが、それも特に渦巻形式を既に持つている点及び重量性の諸点からして、それは明らかに貞観期も相当進んでからの造像であることが知られるのであるが、これら大極的には万福寺諸像が一つの様式性の上にあることは明らかであつて、それは万福寺様式のものと言ふことが出来ると考察される。

□ 清水寺（安来市宇賀莊）の像

清水寺は、寺伝によれば尊隆上人による推古朝の開山とされているが、信疑は不明である。本寺は大同二年に再建されたとも伝えるがしばらくこのことは不問にふして仏像を見ると、本尊十一面観音像、阿彌陀三尊像の名あるものを見ることが出来るが、後者は藤原期のものとして、後日の研究の対称とする。

十一面観音立像（高さ、六尺）

此の像は檜の一木彫材であり、作者は毘首羯磨びしゅかまとされている。毘首羯磨の名は唐招提寺（奈良）の本尊にも見られ印度の彫刻僧であるというが、これは神格化された形而上の存在であるというべきであろう。

本像は天衣を肩に結んで垂らし、冠の両側を紐で結んでいる。斯様な姿態は他地方の十一面観音像或いは諸像には、未だ見ないものである。そして天衣或いは衣文等の刀法に於て殊に顕著なことは、それらが表面的、平面的ではなく、むしろ刻出的であつて衣文が立体的であ

るといえる。殊に天衣に於てその垂れた様の彫出等は、今まで見られなかつた自然観照の確かさがあり、幾分流麗であつて巧緻が見られる。しかし本像には、仏谷寺に見られる清新な力のある刀法は見られないで、幾分力に欠けた弱さが見られ、所謂形式化されたものと云ふことが出来る。

それは翻波式刀法が自由性をもたずして、一種の裝飾性を示している、理想的な形式的刀法に整えられようとしている。しかし本像を拜



十一面観音菩薩像（清水寺）

する時に
精気ある
意志性を
感ずる。
それは特
に顔面部
の相好に
於てそれ
が求めら

れるのである。既に幾分稜角性に富んだ眉の線、目鼻等が幾分まとまつた顔面に対して、強く切り込まれているところに主要な原因があると考えられる。それに胸部に見られる稜角的な衣文の彫り出しにも見ることが出来る。

この胸部に見られるものは、比較的露出部の少ない肉体を、より肉感的に見せる原因である。しかしこの肉感性は肉体描写から出るといふより肉体へのいわば圧迫に於て自然にうち出されたものであるとい

えよう。

本像は後述の仏谷寺諸像の系列に於て見られるもので、前述万福寺の薬師三尊像等よりは時間的に先きのものと考察される。

(三) 佛谷寺（八束郡美保岡町）の諸像

仏谷寺は、正しくは三明院仏谷寺と称し、それは古くからの三明院が新興の仏谷寺に併合されたものである。寺伝によれば、聖徳太子の開創というが信じられない。その後行基菩薩が、此の地に巡錫し、三明院の本尊を彫作したと伝えられた後弘法大師が七堂伽藍を建立し真言宗に属したとしている。勿論これらの眞実なることは解らないが、承久三年に後鳥羽上皇の行在所となり、元弘二年三月には後醍醐天皇の行在所となつたことがあり、相当以前より真言宗として盛んであつたことは知られる。後次第に弱り寛文年間には仏谷寺によつて寺守されていたことが「社帳」に知られている。しかし実際にはもつと以前から併合されたものと考えられる。

永正十三年智恩院の順慶上人により浄土宗に改宗された折には、三明院も仏谷寺と同様の運命にあつたものと思われる。現存の旧国宝五軀とそれが安置されていた大日堂とは、天正年間の兵火に三像が焼失したので、仏谷寺内に大日堂を建立して難を逃れた仏像を安置したものとされる。

これらの彫刻に、多少の修理の部分もあるが一木彫成のものとする事が出来る。

聖観世音菩薩立像（高さ、五尺八寸、台座高、一尺）

本像は左手を除けば左右対称形であるが、首の短かい三道を基として、肩から胸へと發展する重厚な Volume は、変化に乏しく、乳部の隆起も失われていて、それは要素的に分化しない全体的 Volume として見る事が出来る。殊に頭部は角立体であり、前面に比して奥行きが深く、重厚な塊状である。その部分たる鼻、口、顎は他より強調された塊状なもので、意志的な表情となつてゐる。それは卒直にして豪粗な刀法によるものであつて、特に下半身に於ける衣文線は、一



聖観音菩薩像（仏谷寺）

種の肉体への圧迫を感じさせる荒いものであり、その衣文形式に原初的な鬨波式

刀法を見出すことができる。

本像を側面より見ると、胸部から腰部の奥行きが深く、そして塊状であることは、前面が比較的平板的であるに比して相違する点であるが、これは手法上に於て角立体的平面性といつたものから超克してないと考察されるし、又それは単純な物の観方によることを意味することも云える。斯様に考察するも瓔珞の浮彫の手法が、こまやかであることは忘れてはならぬ。

聖觀世音菩薩立像（高さ、五尺五寸九分、台座高、一尺）

本像は虚、空、藏、菩薩と称されている。前記の像と相違するところは、衣文と姿態であり、一木彫成の手法が優れてゐることである。それは前記像の衣文の単調さと比し、本像のそれは深い彫りで複雑な動きを示し、一種の重量性に富んだものである。特に像の隨所に見られる渦施は、この重厚な衣文に一種の動きを与えるものと見る。



虚空藏菩薩像（仏谷寺）

その隆起が肩に伸びて肩を強く張らしめる結果となつてゐる。そして脇下で引き

締められた Volume は、再び腹部に於て發展して、殊に前面へ強く張り出されているが、それは左方にやや腰をひねり、右足を軽く浮かせた安息の姿態と良くマッチして Volume を形成してゐる。

この重厚な Volume は側面的にも、前記の像以上に發展したものである。しかし全体的に彫成の扱い方が幾分なめらかになり、肉感的実在性を思わせるものがある。それは前記の像の如き単純な物の観方より、深化して変化ある観方に推移している。それを証するものとし

て冠下に見られる頭髮がこまやかになり、衣文の複雑化等から明らかであるが、しかし未だ角立体性は超克されてはいない。

薬師如来坐像（高さ、三尺六寸、台座高、二尺二寸五分）

本像に見られる衣文の彫りは非常に浅くて、内部から盛り上げられた Volume と、その力とによつて、肉体形態即ち表面形態となつてゐる。薄く感じられる衣文は、殊に肩及び曲げられた下肢に於て一種の緊張感を表わしている。そしてこの肉体強調は、その内に於ける力



薬師如来像（仏谷寺）

によつて引き締められ、一種の精神力に満ちた姿態となつてゐる。

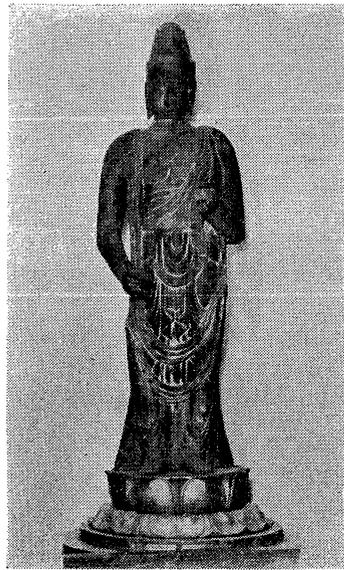
と精神力に満ちた相好は、貞観初期に於ける像によく見られるところであるが、殊に頭部の肉髻の突起と眼から発する精神性は、本像の特色であり又この点について考察すれば、出雲地方彫刻の中に於ても異例のものとなることが出来る。

菩薩形立像（高さ、五尺一寸六分、台座高、一尺）

本像は月、光、菩薩像と称してゐて、前記の諸像と相違するところは形

態的に角立体的であつたものが、本像では比較的円筒体的に化したというのである。それは特に頭部に於て顯著に見ることができて、一木彫成に對する技術の進展したことが考察される。

その円筒化された顔面に鼻、口、顎が一体化された隆起として刻まれていることは、いずれの像についても言えることであるが、それが概して小作りとなつた点は、やや小刻みで浅い衣文手法と共に、それは全体がやや緊張感を欠いで平易的になつたことを知らされるものである。肩



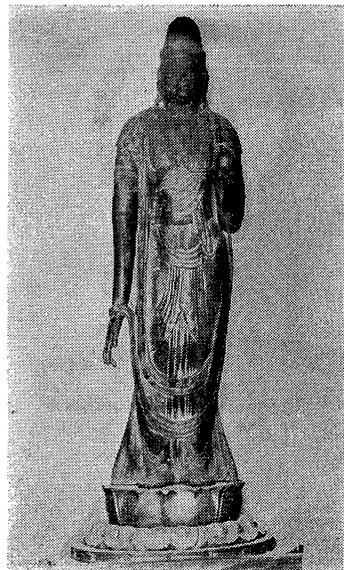
日光菩薩像（仏谷寺）

ある。肩に強調された張力が猶全体の重厚性を維持するとは言え、そこには力の

充実は失われて、次第に表面的に形式化されようとする傾向を見ることが出来る。本像が腹部に於て細められて、殊に左方に腰が張り出している点を見れば、右足のやや曲げられた感じと共に、それは安息の姿態の彫出に失敗したものといえよう。いづれにしても、本像が力への表現の意欲を持ち乍らも、表面的に形式化されんとする働きに合つて、かえつて釣合に欠けた過渡期的のものとなつたことが知られる。

観世音菩薩立像（高さ、五尺五寸五分、台座高、一尺）

本像は、日光菩薩と称し、仏谷寺諸像中で最も細い姿態をして、前記諸像に見られた重厚性は失われ、衣文も比較的流麗なものとなり、稍々形式的に美しく整えられようとして、重厚な塊大性は全く失われんとしている。しかし側面から見れば、奥行きのある Volume を全然失つているとは言えない。そして全体が小作りによくまとめられて内への充実を思わせるものがある。この点は頭部に於ける顔面に精神的な力を示し、程よく示された Volume と緊張とによつて、それは



日光菩薩像（仏谷寺）

やはり他の前記諸像と同内容を持つものである。しかしながら流

麗に、こまやかに整えられようとする衣文形式は、ここから新しく展開されんとする美的内容の起りつゝあることは否定ができないが、しかし中央地方に見られる巧みものではなく、いわばそれは素朴な地方性の粹を破るものではないと考察される。

以上考察したところから、仏谷寺諸像の手法様式或いはその關係について全体的に考察して見ると、聖観音菩薩像に於ては、虚空藏菩薩像ほどの衣文の複雑さを見ることは出来ないが、これ等二軀に共通す

る点は、比較的角立体的で、しかも塊的 Volume に富み、その刀法が比較的豪粗であるという点である。そして面の取扱いや姿態の巧みさの点に於ては虚空藏菩薩像は聖観音菩薩像に勝るものであるから、聖観音菩薩像に見られる様式は虚空藏菩薩像への発展のものとして見ることが妥当であろう。

そして角立体的の諸点は、日光、月光両菩薩像によつて超克せられ、自ら円筒的形態に入つたものであるが、結果に於てこの二軀も円筒性といつたものから完全に脱出し得ていないと思われる。

これらの事實は、それ自体地方作家の持つた素朴な自然観そのものを意味するものとしてよいであろう。これらの諸点からすれば、薬師如来像は、いずれにも片寄らない巧みさが見られるが、極端な肉体強調から自然に出て来る肉感性は、虚空藏菩薩像から出て来る肉感性とは幾分異るとはいえ比較的似通つたものがある。それは特に顔面に於ける彫りの取扱い方に於て、その共通点を見出せる。然して又薬師如来像に於ける胸部の Volume 或いは筋肉は日光菩薩像のそれとよく似てゐる。

以上により諸像が重厚なる形成を意図し、素朴な刀法の中にも比較的力のある衣文、あるいはそれが整えられようとするこまやかさが見られ、しかもこれらの衣文が概して原初的の翻波式刀法を示すものであることは注意すべきことである。尙諸像の間は、多々手法の相異の見られることからして同時の作とは思われぬが、しかしそれ程又開きのあるものとも思われぬ。

四 巖倉寺（能義郡広瀬町）の諸像

本寺は、神亀三年に創建されたと伝えられるが明確な資料はない。聖観世音菩薩立像（高さ、六尺、檜一木彫）

本像を姿態の上から見ると、腰を稍々左にひねり、右足を稍々浮かせ、左手に蓮華を持つ形式は、前記の仏谷寺諸像の形態と似ている。又幾分精神力のある相好からしても仏谷寺諸像の系列に於て見られる。



聖観世音菩薩像（巖倉寺）

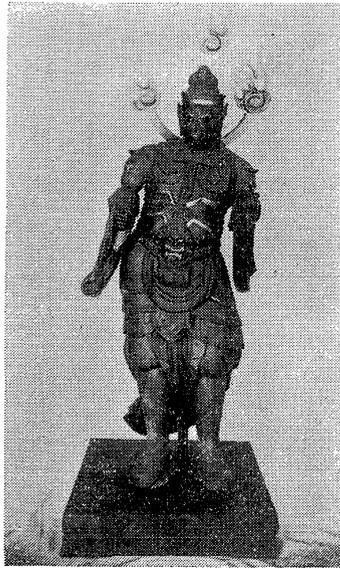
本像を前面から観ると、概して平板的にして、極めて前面への Volume の乏しいもので、特に胸部と脇との関係が平面の組み合わせ的であるといえる。この平板性の爲に下半身に於ける浮足が、屈折されて前へ出るべきが単なる横への表現となり、概して作者の技術的未熟さを感じられる。かかる平板性は顔面についても言えることであつて、隆起を示すものは、鼻だけといつた感がある。しかしながら全体的には平偏であるが、その重厚性は強く、そこから精神力のあることを感じる。下

半身に於ける衣文に於いて稍々鬪波式刀法を見ることが出来る。そしてこの衣文線は、今迄には見られなかつた偏平さと流麗さとを感ずることが出来る。

かくて本像は、比較的時間的に進んだものであることが知られる。

帝釈天立像（檜一本彫）

本像は図の如く、重厚性に富んだものであるが、今迄に見られたような感じに於て見ることは出来ない。即ち腰を右にひねつて上半身



帝 釈 天 像（巖倉寺）

を傾け、一見じくざぐの姿態をとり、全体を変化あるものにして、本像は、

万福寺像に見た豪粗で、大まかな刀法はなく、それは比較的綿密な刀法で一面一面を構成して円味のある肉体面に沿つた柔かみのある素直さを示している。しかしそれらの面は単純な層をなしたもので、面的には概念的である。

本像は、一説には天平様云々といわれるが、天平様式が持つ實在的具象性は本像には見ることが出来ない。例えば腹部に於ける表現に於ては、宗教々儀表現の理想としてこの怪異に満ちたもので、万福寺

の四天王像に比較の見られる人間の實在性を、この顔相は否定している。そしてこの怪異さと共に、柔味のある Volume が内へ引き締められて出る充實的力とは、全姿態よりその精神的異様性を表現しているといえる。しかしこれらは、その手法と共に、聖観音像と同様に比較的末期のものとする事が出来る。

三、結 論

上記の如く仏像彫刻の各々について、出雲地力に於ける貞観期の仏像彫刻が各種各様の特色を持つてゐることは明瞭になつた。しかしそれらの間には又幾多の共通性が見出されるのであつて、全く対立的な存在ではない。この立場に立つて様式の種類をなし、手法様式の特色を考察すると、

- ① 万福寺四天王像四軀
- ② 万福寺諸菩薩立像四軀
- ③ 万福寺薬師如来坐像
- ④ 仏谷寺諸像五軀
- ⑤ 清水寺十一面観音像
- ⑥ 巖倉寺聖観音立像
- ⑦ 巖倉寺帝釈天像

の七つの様式に細分することが出来る。しかし時間的の問題を幾分度外視して、特に様式性を中心として、系統的発展の立場からその共通性を考察するならば、万福寺四天王像に対して、時間的には稍々へだたりがあるが、同じ万福寺諸菩薩像が従属し、これと同時に万福寺薬

師像が同じ類と考えられる。

仏谷寺の聖觀世音菩薩立像が、比較的に感覺的である点、又その精神性と姿態類型の上からしてつながらの感じられるのが清水寺十一面觀音像であり、又巖倉寺像は、比較的貞觀末期の様相を持つという点から同じ類型に入ると考えられる。そして巖倉寺超觀音立像が形態的に仏谷寺諸菩薩像と共通する点、又帝釈天像の精神意志性の強い点などからして、これら二つの類は、仏谷寺諸像群の中に含まれるものと考えられる。

以上の如き見地から、二つの様式分類をなし得たが、しかしこの二類は又各々密接な關係が相互に見出されるのであつて、勿論相對立的なものではない。

今その二様式を万福寺様と仏谷寺様とする。

先づ万福寺様に於ける共通の特色は、既して溫和性であるともいえる、それは比較的自然な姿態の表情に於て見られる。手法的には比較的淺い柔らかな刀法、或いは四天王像に於ける大まかな卒直な刀法や藥師如来像に於ける、彫りの取扱いの不變化性、形式化せられた鱗波式刀法等によつて、人間的自然性ともいへべき落着いた精神性を理解することが出来るのである。このことは貞觀様式に於てよく見られる陰鬱的な怪異性といつたものとは異なり、明るいものが見られる。しかしこの明るさということから、天平様式の明快性と結びつけることは、輕卒である、天平様式に於けるそれは輕快なしかも具象的な實在性の表現から出るものであるが、万福寺様に於けるそれは、その具象性から出るものではなくて、いわば直感的の所作から出たものと言

えるのである。そしてこの直感もその刀法が比較的簡素である点からして、素朴な出雲的自然觀から出たものであると考える。この場に於てこそ彼の垂髮の浮彫も意味を持つものである。

次に仏谷寺様に於ける共通性は、その相好に於いて比較的威圧的な力の表現に勝つてゐる点で、その重厚な塊的 Volume や、強力ないわば豪粗な衣文線から出るものであるが例えば藥師如来坐像に於ける、内から充實した肉體強調に見るが如き点から、精神的意志性の強いものが表現されるといつた形式のものもある。巖倉寺の帝釈天像の如き、手法的には比較的円味のある滑らかなものでありながら、実際にはそれが全体的に強く引きしめられた Volume となり、そこから内的に力の感じられる重厚性が見出されると言つた如く、この威圧的な力の表現も、そのよつて立つ根源の様相は一樣ではないのである。

しかもこれらの精神的力乃至は威圧性も、実際には中央の様式に見られる程の徹底化されたものとは言えず、かえつてそれは弱められた、ゆとりあるものへ或いは全体的に自然な形といつたものへの志向をその裏に見ることが出来るのである。例えば、それは次第に弱められて行く重厚な Volume と、表面的にややこまやかに整えられようとする衣文線に於て、或いは巖倉寺の聖觀音像に於て形態的には、猶未だ重厚なものであるにもかかわらず、その衣文線は滑らかに、しかも流暢となるなど、單なる重厚性、あるいは精神力の衣現としても割り切れないものが残る。例えば重厚に満ちた巖倉寺の聖觀世音菩薩像にしても、面の取扱いは誠に大まかであり、殊に顔面に於て鼻、口、顎といつた塊的 Volume を除けば、全くゆとりのある大まかなものと化

すのであつて、いわばこの大まかさを基底にした、緊張感乃至は精神的な力ともいえるものであつて、実際には、この仏谷寺様の共通性たる重厚性或いは精神的な力も、その基盤においては、かくの如き大まかさ乃至は単純さを伺うことが出来るといえる。このことは即ちひいては素朴な物の観方乃至は地方的自然観を思わせるものである。

更に仏谷寺様に於ける特色は、すべての諸菩薩が、その形態をほぼ同一にしていることであらう。比較的原始的段階の鬚波式刀法が、やや進展した過程に於て見ることが出来るといふことである。

そして、これら出雲地方の仏像彫刻に共通せる明らかな特色は、すべてが一木彫成であること、しかも比較的原始的な鬚波式衣文が、清水寺の十一面観音像への発展に於て見られ、万福寺の薬師如来像に於ては地方彫刻としては、完成されたものと見られる。このことは、こゝに掲げた諸像が貞観時代の中に見られるべきものであることを証している。

又全体的に共通してゐる、肩の強い張り、その重厚性の表現は、既に唐招提寺に於て天平末期から見られるものであり、又仏谷寺聖観音像に於ける、瓔珞の浮彫及び万福寺月光菩薩像に於ける垂髪の浮彫にしても、形式は矢張り唐招提寺及び大安寺の像に於て見出されるが、しかし出雲地方的自然観の一つの表われとして見るべきものである。

尚仏谷寺請像を中心に、広く發展している重厚性も又万福寺諸菩薩像を中心とする、浅い柔らかな刀法による温和性も、窮極的には一種

独得な出雲地方的自然観に於て理解されるものである。その自然観は素朴な簡素なものである。このことは、万福寺日光月光両菩薩像や清水寺十一面観音像等に充分に見ることが出来る。

又比較的肉感的と見られる様式に於いても、それは日羅像の如き極端な肉体強要の面から出たものと簡単に割り切ることが出来ないし、又法華寺の十一面観音立像の如き、或いは観心寺の如意論観音坐像の如き、全姿態的な肉感性の表現といつた面から出るものでもなくて、それは至極自然な形の中から、いわば人間性ともいふべきものが、直感せしめられるもので、単なる肉感性といつては理解しがたいところの比較的簡素な手法に自然と伴つて表われたものである。

然して、これら出雲地方の仏像彫刻が、実際には天平期に於ける中央手法様式の影響ないしは、それを受けながらも、新時代としての貞観様式の中に於て見られるべきものであることは、既に明らかにしたが、中央から受けた手法様式も、結局に於ては、出雲地方的自然観の中に於て選択されたものであることは否定出来ない。斯くして出雲地方の仏像彫刻が、中央様式をもつて簡単に割り切られることが出来ない地方性をもつていることは以上で明らかになつたこと、思う。

四、おわりに

美術史学の研究が、所謂中央の作品の研究に終つて、郷土美術に無関心であることは、決して充分な研究とはいわれなす。

出雲地方の仏像彫刻には、白鳳期に於ける鰐淵寺の仏像、藤原期の清水寺の阿弥佉三尊像、そして貞観期の諸像、さては鎌倉期の赤穴八

幡社の神像等多くのものが現存しているが、今回はその中の貞観期諸像の様式を考察した。しかし頁数の関係上から手法様式に終り、美的様式を割受けねばならなくなったことは、本考察の完結とはいわれな
い。此の点は御賢察を得たい。考察に当つては、かなりの独断もある
ことと思うが、今後の研究に俟つこととし、諸賢の御高教を得れば大
幸である。

主要参考文献

- 「日本美術史大系」彫刻篇。「世界美術全集」日本篇。「日本彫刻史研究」
小林剛。「密教美術」佐和隆研。「日本美術史図録」源豊宗。「芸術学」
矢崎美盛。「芸術通論」山際靖。「芸術の創造と歴史」井島勉。「出雲
風土記」。「島根県史」。「八束郡誌」。「出雲市誌」。「島根県文化年表」。「日
本文化史」辻善之助。「日本古代文化」和辻哲郎。「山陰の古寺」下村音
雄。

一九五六、一一、二三

終